

# 浅草喜劇人銘々伝

7

西条 昇

江戸川大学教授・喜劇史研究家

## 第一次「カジノ・フォーリー」篇

浅草寺本堂から浅草六区へ向かう道沿い（現在の奥山おまいりまち）の木馬館の隣りには、その昔、水族館があった。明治32年の開業で、海水を運んで様々な魚を見せていたが、やがて水族館が珍しいものではなく客足が落ちた。客寄せのため、大正期には二階に余興場を作って娘手踊り、安来節、太神楽、小芝居などの興行を行ったものの、何をやっても当たらずに幕内では「腐れ小屋」とさえ言われていた。水族館を管理していた桜井源一郎に余興場での「レヴュー」の興行を勧めたのは、義弟でパリ遊学から戻った画家の内海正性である。この話に正性の実弟の内海行貴、画家でアナキストの溝口稠、イタリア音楽の翻訳をしていた徳永政太郎が加わり、昭和4年7月10日の旗揚げに向けて動き出した。劇団名の「カジノ・フォーリー」はパリのレヴュー劇場「カジノ・ド・パリ」と「フォーリー・ベルジュール」を組み合わせたものだ。溝口の人脈から、「電気館レヴュー」を手掛けた東五郎が幕内主任、エリアナ・パ

フォーリー裸史）。水族館のあった四区が六区の中心部から少し離れていたことも大きかった。

そうした中でも、コック姿で魚を捕まえようとする榎本の水泳踊りが珍無類だったという（旗一兵『喜劇人回り舞台』）。昭和4年7月23日からの第2回公演での「ヴァアラエテイー」では榎本が中村操らとのナンセンススケッチ「ドアー」と林葉三とのボクシングダンスを披露している。徳川夢声が「パントマイムの天才」と評した林との絡みはさ

ヴロワ門下のロシアンダンサーである石田守衛が座長格となった。

7月に入って、石田は「根岸大歌劇団」で一緒だったエノケンこと榎本健一に「ひとつ助けてくれないか」と声をかけた。かつて榎本が『猿蟹合戦』での大立ち回りをよそにお櫃を抱えて米粒を拾って食べ歩く猿の仕草で場内の笑いを攫ってみせたことを石田は覚えていたのだろう。丁度、榎本は京都や名古屋の撮影所を転々とした後に麻布十番の実家の煎餅屋に戻ってブラブラしていたところだった。

旗揚げ初日の東京日日新聞や読売新聞の朝刊には「日本最初のレヴュー劇場」と謳ったカジノ・フォーリーの広告が掲載されているが、第1回公演の客入りは芳しいものではなかった。電気館レヴューの木村時子、柳田貞一、二村定一のようなスター級の人気者はカジノには居らず、レヴューに花を添える女優や踊り子も、サトウハチローによれば「どの女の子もみんな、臺がたつていて、古いがんどどきみたいで、ちっとも心のアルコールをゆするようなもの一人もいなかった」ということだ（『浅草』所収「カジノ

ぞかし面白かったに違いない。レヴュー『大進軍』では出征する楽長に扮し、自動車を描いた絵が曲に乗って移動する前で行進の感じを出してみせた。間口7メートルの狭い舞台で、小柄な身体を躍動させて笑わせるエノケンの姿が目につかぶようだ。二枚目半の石田は座長格ながら助っ人の榎本に食われる形になった。

結局、不入りには勝てず、同年8月25日からの第4回公演が終わった9月10日でカジノ・フォーリーは解散となる。徳永、東、石田は身を引いて内海行貴が経営に乗り出し、10月から再出発することが決まった。今度は誰を座長格にすべきかと相談する行貴と溝口の二人の頭の中には、すでにどنگり眼の小柄な男の顔が浮かんでいた。

※34ページの写真も併せてお楽しみ下さい。



昭和4年7月10日に浅草水族館の二階でカジノ・フォーリーが旗揚げされた際の写真。正面入口前には関係者たちが立ち、旗揚げを祝う多くの花輪が飾られている。

日本最初のレヴュー劇場  
レヴュー青春行進曲  
バラエティー 拾貳種  
レヴュー水族館  
専属男女優數拾名出演  
七月十日より第一回公演  
カジノフォーリー  
大管絃楽團  
大ジャズバンド  
キガナ 楽長

浅草水族館 40 せん

カジノ・フォーリー旗揚げ当日の新聞広告。〈日本最初のレヴュー劇場〉と謳われている。

# 西条昇の浅草喜劇コレクション 第一次「カジノ・フォーリー」篇

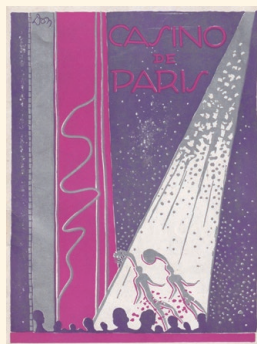
西条昇の所蔵資料の一部を本文ページ（P12-13）と併せてお楽しみ下さい。



浅草水族館で旗揚げされた第一次カジノ・フォーリーの昭和4年7月23日からの第2回公演プログラム。エノケンがレビュー『大進軍』で本領を發揮した。



昭和4年8月25日からの第一次カジノ・フォーリーの第4回公演プログラム。レビュー『どつちでせう』とバラエティーの2本立て。旗揚げ以来の不入りにより、これが第一次カジノの最後の公演となった。



劇団名の由来の一つであるパリのレビュー劇場「カジノ・ド・パリ」の1927-1928シーズンのプログラム。



劇団名の由来の一つであるパリのレビュー劇場「フォーリー・ベルジェール」の1950年代のプログラム。



正延哲士『奈落と花道』（三一書房）。電気館レビューと第一次カジノの幕内主任、東五郎の半生を描いている。

**西条 昇** 江戸川大学教授、喜劇史研究家。

昭和39年、東京・飯田橋生まれ。幼少期より浅草をはじめとする都内の劇場や寄席で喜劇と演芸を観て育つ。新聞・雑誌への連載やTV・ラジオ出演も多数。主な著書に『ニッポンの爆笑王100』『笑伝・三波伸介』など。

